
現代の錬金術

縄跳び

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代の錬金術

【Zコード】

Z9306P

【作者名】

縄跳び

【あらすじ】

私はタカハシの親友ヤスハラから久しぶりに連絡があった。なんでも折り入った話があるようだ。イズミと一緒に帰れないのは残念だが親友のためだ。仕方がない。

ヤスハラの話

今日は私にしては珍しくイズミと一緒にには帰らない。イズミにはまだ講義が残っていることがあるが、それだけならいつものことなので講義が終わるまでどこかで時間をつぶして待っている。今日はそれだけではない。十年来の親友……ヤスハラが折り入って話があるから一人で大学から最寄りの喫茶店に来てほしいのだそうだ。

この喫茶店、アンティークな食器やテーブルで整えられており雰囲気もそれに合わせてあってなかなかお洒落で学生には人気がある。が、私は行ったことがない。イズミ曰く、「コーヒーは苦いからや。」だそうだ。私も喫茶店に一人で粘る度胸はないので近くのコンビニで立ち読みをしたり大学内をうろついて時間をつぶす。イズミのゼミの研究発表に潜り込んだこともあった。

ヤスハラは大学には行つておらず既に働いている。イズミと知り合つてからは他の友人達と同様、疎遠になつてしまつてしまつていて元気そうでなによりだ。あいつならどんな仕事をしていくても上手くやつていけるのだろう。そんなことを考えながら喫茶店で十分程待つているとヤスハラがやつて來た。あいかわらず時間に正確な奴だ。

「久しぶりだな。」

と私が声を掛ければ

「ああ、そうだな。」

と返事が返つてくる。無愛想なところは変わっていない。あと飾り気のない服装も。無地で薄手のTシャツにジーパン。今の季節に

喧嘩を売っているようなスタイルは私には到底真似できるものではない。顔は昔と変わらずイケメンだ。それなりの格好をすれば歌つて踊れる某事務所にも入れるのではないか。

「それで？話つて何なんだ？」

無愛想なヤスハラのことだ、「そうだな。」以外の返事が返つてくるとも思えない。挨拶もそこそこに本題に入る。

「俺に殺人の容疑が掛けられている。」

「え？」

……突然のことで上手く返事ができなかつた。今日は四月一日ではないはずだ。

「俺に殺人の容疑が掛けられている。」

「お前、人を殺したのか？」

自然と小声になる。どうやら重い話のようだ。
「違う！俺じゃない！」

ヤスハラは叫んだ。

「し、声が大きい。わかってるよ。お前はそんなことをする人間じゃない。で、私に何か協力できるのか？」

実際に私に何ができるとも思えない。しかし今のヤスハラの不安を

和らげてやるくらいはできる。お世辞にも似た一種の慣用句のよくな返事を返すとヤスハラは私が言い終わると同時に

「真犯人を見つけて俺の無実を証明してほしい。警察は俺が何を言つても信じようとはしないんだ。」

と声を被せてきた。

「ちょ、ちょっと待つてくれ。そんなことに私が首を突っ込めるわけがないじゃないか。せめて法学部とかの弁護士を目指してる連中に相談すべきじゃないか？」

そうだ。私は弁護士を目指してはいないし法学部ですらない。立派な工学部だ。いや、立派は言いました。とにかく、そんな方向には協力できない。

「その方面にはもう相談したさ。今は泥船でもなんでも頼りたい気持ちなんだ。」

（私は泥船か……）

つまりヤスハラは本気で私にどうこうしてほしいわけではないのだ。そこまで馬鹿ではない。具体的には本気で私に何とかできると思える程馬鹿ではない。そう考えればいくらか気が楽になつた。代わりに私のプライドに火がついた。意地でも首を突っ込んでやる。

「お前は頭が良かつたからな。もしかしたら専門外でも何とかしてくれるんじやないかと思つてな。」

「……まあ泥船なりに考えてみるよ。」

今私という泥船が燃えている。

「じゃあ頼んだぞ。もちろんここ」の支払いは任せてくれ。」

私にどれ程の期待をしているのかわからないがヤスハラは嬉しそうに席を立とうとしている。

「ちょっと待て。」

「どうした?」

「どうしたじゃないだろ?。その事件について話してくれないと。」

何も分からぬままでは何もできない。泥船にも意地というものはあるのだ。しかし残念ながらヤスハラは人は良いがやや頭が悪い。まさかこいつ、今までの相談相手全員に同じことを言われてるんじゃないだろうか。

「やういえはそうだな。じゃあ手短に話すぞ。」

「詳しく話せ。」

(本題にこいつは……)

「ん?わかった。少し長くなるが勘弁してくれな。まず殺されたのはヨシナガレイコ。女性だ。俺の元カノでもある。」

「お前元カノが殺されたのか?」

(よく平然としていられるな。)

「ああ、そうだな。今の彼女だつたらこんなに落ち着いてなんかいられないだろうな。だが今は他人だ。それで、殺された場所だがレイコの自宅だつたそうだ。首を絞められてリビングで死んでいたんだとさ。あと睡眠薬とかは出なかつたんだと。部屋が荒らされてたり暴れた形跡がなかつたから知人による怨恨目的で、残つていた靴の跡から単独犯で男らしい。」

「靴の跡なんて証拠になるのか？」

犯人が女性であつても男物の靴を履けば誤魔化せるではないか。

「知るかよ、そんなこと。ともかくそのおかげで知り合いで男で元彼の俺が疑われたんだ。元彼だつたからわかるがレイコはいい女だつたよ。人当たりはいいし気配りもできる。何より美人だ。誰かの恨みを買つてやうな女じゃない。」

「じゃあなんで別れたんだ？」

「浮気だよ。今の彼女と浮気したんだ。」

「お前最低だな。」

ふと私とイズミの関係に当てはめてみる。……あり得ない。お互に浮気ができるような関係ではないのだから。

「つるせえ、ほっとけ。不倫は文化なんだよ。死んだ日時だが二日前の午後六時頃だそうだ。」

「その時間お前は何をしてたんだ？」

「ゲーセンで遊んでたよ。だがそれを証明できる奴がないんだ。」

「浮氣した天罰だな。」

「ふん。事情聴取で刑事が言つてたことはそれくらいだ。じゃあよろしく頼むよ。」

「ああ、一度試験も終わつて時間もあるし頑張つてみるよ。泥船なりに。いや、待て、今の彼女の連絡先を教えておいてくれ。」

「ん? どうするつもりだ?」

「こんな人から話を聞かないとな。」

「なんだ、そういうことか。ほら、これが携帯の番号だ。間違つても手え出すなよ?」

「出でねえよ、馬鹿。」

(私にはイズミがいる。)

ひとしきり話が済んでヤスハラは伝票を持って立ち去つた。私としてはいい暇つぶしができたくらいに思つていた。結局は警察が解決するだらうと。この時は……

「さあ、まずはヤスハラの今の彼女に話を聞いてみるか。」

話が長くなつてしまつた。もうイズミの講義も終わつていいだろ?。家に帰つたらイズミに何と説明しようか。

イズミの心情

「タカちゃん遅い。」

家に着いてすぐに不機嫌な顔をしたイズミが目に入る。どう言い訳をしようか考えていたのに出鼻を挫かれた。イズミは待たされるのが嫌いだ。だから先に帰つたはずの私が自分より遅く帰ってきたことが不満らしい。イズミに言わせれば、「待つ時間は人生のムダ。待つくらいなら遅刻して謝つた方がまし。」なんだそうだ。

「悪かったな。用事が伸びてしまつて。」

今さら変に言い訳をしてイズミの屁理屈に言い負かされるのも癪なので私は素直に謝る。

「ん。タカちゃん、プリンは？」

しまつた。完全に忘れていた。ヤスハラの話が思いの外シリアルアスだつたせいだ。

「すまん。忘れた。」

イズミはプリンがあれば大抵のことは許してくれる。逆に言えばもしそうなことを忘れてしまつと

「はあ？ほんとあり得ないんだけど。人待たせといてお土産もなしとかまじふざけてない？もういい！おなかへつた。ご飯作つて。」

……」うなる。今が夕飯時だつたから助かつたがそうじゃなかつた

ら大変なことになつていただろう。危なかつた。

「今度買つてきてやるから。イズミはなんか食べたいもんあるか？」

「タカちゃん。」

「…………

何も聞こえない。何もだ。

「じゃあスペゲッティ。ミートソースのやつ。」

「わかった。すぐ作るから大人しくして待つてね。」

不思議な間があつたがこれ以上イズミの機嫌を損ねたくはない。私は何も言わずに夕食の準備にとりかかる。

「タカちゃん、今日の用事つて何だつたの？」

夕食の準備をしている私の背中にイズミが話しかける。

「ああ、古い友達から久しぶりに連絡があつてな、少し世間話をし
てたんだ。」

「ふうん。うちが知つてる人？」

「いや、知らない奴。」

「名前言つてみてよ。」

「ヤスハラ。」

「どんな人？男？女？かつこいい人？」

「男だよ。ていうかどいつも良くないか。そんなこと。」

「うん、まあなんでもいいや。タカちゃんご飯まだあ？」

イズミには自覚しているのかどうかはわからないが相手の事を詮索する癖がある。自分が納得できるまで尋ねてくるので正直などいられ直してほしいと思つ。

「出来たぞ。ほら、ミートソーススパゲッティ。」

「ん。いただきま～す。」

「いただきま～す。」

嬉しそうにスパゲッティを食べるイズミを見ていると私まで嬉しくなつてくれる。

「イズミ、今日は何の講義だつたんだ？」

食べるのに夢中なイズミに戯れに話しかける。

「物性物理学の分野で、レアメタルに似た性質を持つ合金の理論上の合成方法。」

聞く話題を間違えた。イズミが何を言つてているのか私には全くもつて理解できない。

「でね、今度の学会で「*ヤマハ*」の研究を発表するんだ。タカちゃんも見に来てよ。」

そもそも私とイズミの専門は数理物理学ではなかつたか。私は専門分野だけでいっぴいといっぴいだというのに。

「ああ、わかつた。」

私に今度の……といふか毎回のことだが、イズミの学会の内容を理解できるわけがない。だがどうせ待つなら暖かい部屋の中が良い。

とりあえず明日は休日なのでヤスハラの件で奴の彼女に話を聞いてみるとしよう。イズミと居たいのは山々だが仕方がない。泥船が燃えあがつているのだ。帰りにプリンを買っておけばいいだろう。

「「「」」」

私も同じタイミングでスパゲッティを食べ終わつた。

「「「」」」

イズミの心情（後書き）

「物性物理学」……物質のさまざまな巨視的性質を微視的な観点から研究する物理学の分野。量子力学や統計力学を理論的基盤とし、その理論部門を物性論と呼ぶことも多い。これらは日本の物理学界独特的の名称であるが、しばしば英語の *Condensed matter physics* (凝縮系物理学) に比定される。狭義には固体物理学を指し、広義には固体物理学（結晶・アモルファス・合金）およびソフトマター物理学・表面物理学・物理化学、プラズマ・流体力学などの周辺分野を含む。

「数理物理学」……、数学と物理学の境界を成す科学の一分野である。数理物理学が何から構成されるかについては、いろいろな考え方がある。典型的な定義は、*Journal of Mathematical Physics* で与えているように、「物理学における問題への数学の応用と、そのような応用と物理学の定式化に適した数学的手法の構築」である。

Wikipediaより抜粋。

タカハシの考え方

土曜日、ヤスハラの話を聞いた次の日、早速ヤスハラの彼女に話を聞く。イズミがいると話が確実にややこしくなるので隣で眠つてゐるイズミが起きないうちに片づけるとしよう。

リビングで朝食を食べ終わり彼女に連絡をする。連絡先は確かヤスハラから聞いておいたはずだ。彼女の電話番号に携帯から電話をかける。

プルルルルル……

（知らない人に電話をかけるのは何年経つても慣れないな。）

「もしもし。」

電話口から若い女性の声が聞こえた。

「もしもし、タカハシと申します。あなたの彼氏のヤスハラの友人です。彼が関係している事件についてお話を聞かせて頂けませんか？」

「はあ、構いませんが……」

良かった。少し不仕付けな尋ね方をしてしまったが話は聞けそうだ。しかしまるで無関心な言い方が引っ掛かる。

「……もし良かつたら直接会つてお話を聞きたいのですが今日お時間は大丈夫でしょうか？」

電話で済ませるつもりだったがさつきの返事が気になつた。ヤスハラの彼女なのだからそう遠くない所に住んでいるのだろう。しかしイズミにまじう説明しようつか。

「では……お昼の4時に綾西大学前駅前の「バロック」という喫茶店でよろしいですか？」

「わかりました。ではまた。失礼します。」

確か「バロック」とは昨日ヤスハラと話をした喫茶店のことだ。やはり彼女もヤスハラと同じくこの近辺に住んでいるようだ。

「タカちゃん誰と話してるの？」

「うわー。」

不意のこと驚いてしまつた。イズミは私が起きたことがわかつたかのように後を追つて起きてくる。いつものことだが今日はイズミに隠れて電話をかけていたので気付かなかつた。

「誰と話してるの？」

イズミが訝しげに聞いてくる。

「誰でもいいじゃないか。腹減つてたの?なんか作るよ。先に顔洗つてこい。」

慌てて話を逸らす。

「ん。」

イズミが洗面所に向かう。私はイズミの朝食を用意しながらこれからのことを考える。イズミを連れていくと間違いない話が進まなくなる。どうしたものか。

「洗つた。」

「出来たぞ。」

今日は手のかからないトーストとココアである。イズミは苦いものが苦手でコーヒーは全く飲めない。そしてミルクよりはココアが好きだ。もちろんトーストにはバターとたっぷりの砂糖をまぶしてある。

「いただきま～す。」

「イズミ、すまないが今日は一緒に居れないんだ。」

「なんで?」

イズミが食べるのを止めてこちらを向いている。上手い理由が思いつかない。どうなつたらいいの?と強引に……

「昨日の用事の続きだ。昼から出掛けた。夕飯には間に合わせるから。」

「何の用事? そんなに大事なの? つてか一緒に行くし。」

「いや、お前は来るな。話が長くなる。」

「ヤだ。馬鹿になつてもここから一緒に行く。」

……！」のままでは埒が明かない。

「とにかく、お前はつっこいへるな。出掛けるのは2時からだしそれまでは一緒に居てやるから。」

「む～。」

イズミの顔に不満がありありと見えるが、一気に押し切らなければ。

「ちやんとプリン置つてきてやるから。な？」

「……わかった。でもせっかくの休みなのに行へんの？」

「「バロック」だ。」

「ふ～ん。うちの学校前の？」

「ああ。」

どうやらわかつてくれたらしい。イズミには悪いが親友のためだ、仕方がない。この埋め合わせもしなければ。

「じゃあまだ出掛けるまで少し時間あるし、かつてとそれ食べてゆつべつしちゃつか？」

「うふ。」

機嫌を直したらじこイズミが急いでトーストを食べ始める。

「うわあ。」

「やうだ、食べ終わつてすぐで悪いが昼食は何がいい? お前の分だけ作つて出掛けるか?」

「ラーメン。」

（またここは……）

わかつてて言つているに違いない。

「無理じやないか。作つてすぐ食べないといけないんだぞ。」

「うふ。わかつてる。だから出掛かるサリガリに作つてよ。」

「わかつたよ。わづかる。」

イズミのささやかな嫌がらせだつ。だが私は快く受け入れる。こ
れ以上にじがいの都合ばかり押し付けられない。

「タカラちゃんちゅ~。」

「わーんむ。」

イズミが飛びかかってきた。少し驚いたが今日は特別だ。一緒に居
られない分いつも以上に甘やかしてやる。我ながらイズミには甘い。

ヤスハラの彼女

「醤油でよかつたか?」

といつよりイズミは醤油ラーメン以外食べない。ラーメンを作り終えて私は出掛けの準備をする。

「ん。 いただきま～す。」

「夕飯までには戻るから。」

「それさつきも聞いた。」

イズミがそつけない返事をする。寂しいのだろうか。私だってそうだ。

「じゃあ行つてくるから。」

「タカちやん。」

イズミがラーメンを食べる手を止めて呼ぶ。
「どうした?」

「いつてきますのちゅーは?」

「え?」

そんなことをしたことは今まで一度もない。初めてのこととで私は

呆気にとられた。

「ちゅ～。」

「んつ。」

（まあたまにはこいつこいつのも悪くないのかもしれない。）

「いってきますのちゅ～」を終えて私は家を出た。

自宅から最寄りの駅へ向かう。今日は昨日より肌寒い。着込んできて正解だ。駅までは近く、歩いて五分ほどである。駅から目的地の綾西大学前駅までは各駅停車だが一本で乗り換えはない。こんなに条件の良い部屋を借りてよかつたと本当に思う。

暖房の効いた電車に揺られて少しうつとうとしてきた。

「綾西大学前～、綾西大学前～。」

駅員のアナウンスではつとする。危なかつた。

駅を出て昨日もヤスハラと話をした喫茶店「バロック」へ向かう。ヤスハラの彼女から話を聞くのは四時からだつたはずだ。今は三時半、少し早く着いてしまつた。外から覗いてまだいなかつたらコンビニかどこかで時間を潰そう。……と思つたのだがヤスハラの彼女が中でコーヒーを飲んでいるのが見えた。どうやら彼女はヤスハラ以上に時間に厳しいらしい。少し早いがさつさと話を終えて早く家に帰る。イズミが待つている。

「こなんにちは。今朝お電話したタカハシです。」

中に入つて彼女に声を掛ける。彼女は驚いた様子で、

「え？」、「こんにちは。タカハシさんですか？」

……しました。今朝の電話では名前を伝えただけで背格好の話をしないなかつた。今の彼女には私が超能力者か何かに見えていたことだろう。しかしそれならそれで連絡してくれれば良かつたのに。

「昨日ヤスハラからあなたの連絡先を聞くときにあるあなたの背格好も一緒に聞いていたので。今朝の電話でお話しあくのを忘れていました。すみません。」

「そうだったんですね。急に声を掛けられたので驚いてしまつて。」

「すみません、驚かせてしまつて。それでですね、ヤスハラが関わつてゐる事件をどれくらい知つてているんですか？」

本題に入る前にもう一度確認する。

「えへつと…彼の前の彼女さんが殺されたとしか。」

「ええ、その事件です。ヤスハラがその事件の容疑者だといつ」とは？」

「それも知つてます。でも彼は違います。彼はそんな人じゃないんです。私にはよくわかります。だつて彼の恋人なんですから。」

彼女は必死にヤスハラの無実を訴えている。しかしそんな姿がますます逆に今朝の無関心さを浮き彫りにしていく。

「あの……」

「はい？」

私は彼女の話を遮って話しかける。一つとっても大事なことを思い出した。

「まだお名前を伺つていませんでしたね。」

「あ！すみません。ハシダとおっしゃいます。ハシダ ノリコ。」

「そうですか。ハシダさん、ヤスハラと付き合つて始めたのはいつからですか？」

「確か……ひと月ほど前からです。」

「最近ですか？」

「そうですね。」

付き合つてひと月なら最近ではないのか。女性の時間の感覚はよくわからない。

「では事件が起つた日、つまり四日前の午後六時頃、あなたは何をしていましたか？」

「その日は一日、友人と一緒にいました。」

「女友達ですか？」

「はい。」

「どーにいたんですか？」

「街をぶらついていました。お買い物をしたり。」

「なるほど。では前の彼女のことはどれくらい知っていますか？」

「そんなに良く知ってるわけじゃ、そんなこと話題にもなりませんし。」

そもそもうだ。前の恋人の話をされて喜ぶ女性はほとんどいないだろう。

「あ、すみません。ちなみに一緒にいたといつ友達のお名前は？」

今度は忘れない。

「カワハラ チヒロです。」

「仲は良いんですか？」

「ええ、昔からの親友です。」

まあこじんなどこりだらう。今日はもう帰らう。

「わかりました。聞きたいことはこれくらいです。お手数をかけました。」

「いえいえ、こちらこそ。」

「では。」

「ついで私は伝票を持って立ち去る。

「あ、ありがとうございます。」

彼女……ハシダノリコは礼をする。

「いえ、気にしないでください。」

「バロック」で支払いを済ませ店を出る。そのまま駅へは行かずコンビニへ立ち寄る。プリンを買つたのだ。

「あつがとうございました。」

コンビニ店員の挨拶を背に駅へ向かう。夕方になると来た時より一層肌寒い。時間は……良かった、夕飯には間に合つそうだ。

イズミの嫉妬

「ガチャツ。」

おかしい。玄関に鍵が掛かっている。中にはいないのだろうか。私は鍵を開けて中に入った。

「ただいま。イズミ、いないのか？」

少し大きめの声でイズミを呼ぶが返事はない。

「イズミ？」

靴を脱いで中に上がり、リビングや寝室、バスルーム等、部屋中を探す。イズミの姿は見えない。

（あいつどこに行つたんだ？もつすぐ夕飯なのに）

私は携帯を取り出しイズミに電話を掛けた。

プルルルルル……プルルルルル……

「ガチャツ。」

「イズミ、今どこ……」

「ただいま、電話に出ることが出来ません。ピーと……」

そこまで聞いて携帯を切つた。本当にどこへ行つたのだろう。

(とりあえず夕飯を作ろう。夕飯の時間になれば帰つてくるだろ。)

夕飯の準備をしている間もイズミの事が頭から離れない。

「痛つ。」

考え事をしながら人参を切つていたら包丁で手を切つてしまつた。イズミがいつ帰つてくるかわからないので今日はカレーにする。

「ばんやつり、絆創膏…」

調理を中断して薬箱を探し、切つた人差し指に絆創膏を巻きつける。

(帰つたら文句言つてやらないと。)

自分でもハつ当たりだとわかつてゐるが黙つていては私の気が治まらない。

「ガチャツ。」

「ただいま。」

イズミが帰つてきたようだ。心なしか声に元気が無い。

「どうしてたんだ？ 携帯にも出ないから心配したじゃないか。」

「しらない。」

イズミが俯いたまま返事をする。本当にビリしたんだ。

「外で何かあつたのか？」

「しらない。」

しらない。としか答えないイズミにだんだん腹が立つてきた。

「知らないわけがないだろ。どこ行つてたんだ？」

言い方が自分でもわかるくらいこきつくなつていて。

「しらない！」

イズミがこちらを睨みつける。その目が赤く腫れているのに気がついた。

「泣いてたのか？本当に何があつたんだ？」

「……」

イズミは質問に答えず寝室へ向かつ。

「夕飯食べないのか？プリンも買つてきただぞ。」

「…………リン。」

「え？」

「プリンちょうどだい。」

イズミが小さな声で返事をした。やはりプリンの力は大きい。

「夕飯はいらないのか？今日はカレーだぞ。」

「いらない。」

そう言つてイズミは冷蔵庫からプリンを取り出し食べ始めた。

（カレーにしどって良かつた。）

「じゃあ私はカレーでも食べよつかな。」

イズミに聞きたいことは山ほどあるが少し時間を置いた方が良いのかもしれない。

「いただきます。」

私はカレーを食べ始める。イズミの口に合させて作るので味付けは甘口だ。

「……」

「……」

沈黙の時間が一人の間を流れる。『気まずい。』

プリンを食べ終えテレビを見ていたイズミが唐突に口を開いた。

「だれ？」

「何が？」

イズミが何を言いたいのかわからない。

「もういいーだいつきらいー！」

声を荒げてイズミは寝室へ向かう。わけがわからない。

（私が何か悪いことしたのか？出掛ける前はあんなに機嫌良かつたのに。）

「む、～、む、～、む、～…」

携帯が振動している。ヤスハラから着信だ。何かあったのだろうか。

「もしもし。」

「おひ、タカハシ、もういいぞ。」

「何がだ？」

今日は主語を言つてはいけない日なのか。イズミもヤスハラも説明が足りなさすぎる。

「例の事件だよ。今日警察が来たんだ。それでビビりやけり俺の疑いは晴れたらしい。」

「なんだ、そのことか。」

警察の捜査力を甘く見てはいけない。そのうち警察が解決するだらうとは思つていたが、私の予想よりもかなり早い。というよりまさかヤスハラは軽く取り調べを受けただけで大騒ぎしていたのではないだろうか。

「なんだとはなんだ。喜べ。俺は無実だ。」

「わかつてたよ。最初から言つてたじゃないか、お前はそんなことするよくな奴じやないつて。」

「そうだよな。お前だけだよ信じてくれてたのは。」

ヤスハラの彼女……ハシダノリコは信じていなかつたのか。やはり付き合つて一ヶ月だと所詮この程度なのだろう。

「で？ 結局犯人は誰だつたんだ？」

なんだかんだいつても気になる。

「それがまだわかつてないらしいんだ。」

「じゃあどうして疑いが晴れたんだ？」

「なんでもレイコの家の玄関のドアノブから誰だかわからない指紋が出たんだつてよ。」

「そんなどいろ一番に調べるもんなのにな。」

「そんなどこ調べなくてもいいくらいに証拠が残つてたんだろうな。でもあんまり俺が否認するもんだから警察も細かいとこを調べたん

じゃないか？」

「ふーん。そういうもんなのか。まあなんにせよ良かつたじゃないか。」

「おひ。迷惑かけたな。今度何かじて馳走するよ。」

「ああ。期待しないで待つてるよ。」

「じゃあな。」

ヤスハラとの電話を終えて私はほっとした。だが今の私にとつてもつと深刻な問題がある。どうやってイズミの機嫌を直そうか。

「おやすみなさい。」

一人でつぶやいてみる。イズミは先に寝てしまつていてるので返事はない。いくら喧嘩しても寝室にベッドが一つしかない以上同じ場所で眠るしかない。とはいっても押し入れに布団は入つていてるので本当に嫌われていたら一緒に寝ることさえできない。そう考えるとまだ希望はあるようだ。それにしてもイズミの寝顔は可愛い。普段バラバラに寝ることがないのでこういう機会はなかなかない。私は滅多に見れないイズミの寝顔を見つめる。たまらなく愛おしくなってきた。イズミの額にキスをする。イズミの頭を撫でながらまだ腫れの残るまぶたから赤く上気した頬、そして甘く誘うよつな唇へとキスの雨を降らせる。

「ん。」

イズミが声を上げる。……まだ起きない。しかしこれ以上をやつて本気で嫌われたくないのでは我慢することにした。続きは仲直りしてからだ。それにしても何が原因でイズミは怒っているのだろう。イズミは時が経てば怒りが収まるような性格ではない。何としても原因を突き止めなければ。

「おやすみ、イズミ。」

もう一度だけ声を掛けイズミの小さな頭を軽く抱きしめる。日曜日、田を覚ますと隣にいるはずのイズミがいない。時計を見るとまだ六時前である。イズミが早起きするなんて余程の事がないと

あり得ない。逆に言えば余程の事があるのだ。もしかしたらそれが原因なのかもしない。帰つてきたら今度こそイズミとしゃんと話をしよう。そのためこそ少しだけ寝る」と云ふ。

「ただいま。」

イズミが帰つてきた。時間は……十一時半、昼食前である。

「おかえり。昼食は食べたのか？」

「まだ。」

「何か食べたいものあるか？」

「なんでもいいよ。」

まだ機嫌は良くないが話は出来そうだ。昼食を食べたり話せば。

「じゃあ少し待つて。すぐ作るから。」

「ん。」

といつても昨日のカレーが残つてるのでそれを盛り付けるだけだが。

「ほり、カレーだ。」

「ちやんと甘い？」

「当然だ。」

「わかつた。 いただきます。」

「 いただきます。」

カレーの味付けだが市販の甘口ではイズミは納得しない。さらにリソゴやハチミツを加えた特製の超甘口だ。さらにイズミが食べやすいと言うので水を多めにしている。もはやカレーと呼んではいけないのかもしれない。私も初めは食べられたものではなかつたがもう慣れてしまった。

גַּתְּהַנְּגָנָה

イズミが食べ終わる。イズミの好きなものを食べるときの速さには目を見張るものがある。

גַּתְּתָן עַדְלָנִי

イズミが食器を片づけている間に私も食べ終わった。

「イズミ、朝早くからどこ行つてたんだ?」

食器を洗いながらイズミに話しかける。

「どうでもいいじゃない。別に。」

ダンツ！！

「アーヴィングが死んだ」

流し台を叩いて叫ぶ。自分でも驚くほど大きな声が出た。イズミの方を見ると明らかに怯えている。

「あ……すまない。びっくりさせたな。でも本当に心配なんだ。なあイズミ、ちやんと答えてくれ。どうして行ったんだ?」

「……嘘つき。」

「え?」

イズミの誤解

「浮氣しないって言ったのに。」

イズミが目に涙を溜めて言う。その声から生の感情が伝わる。

「だから何の事だ？」

イズミが何を言いたいのかわからない。私が浮氣などするはずもないのに。そのことを誰よりもわかつているのはイズミではないか。

「じゃあ昨日一緒にいた人は誰なのさー。」

イズミがとうとう泣き出してしまった。

（なんだ、そういうことが。）

全てを理解した私は慎重に言葉を選びイズミに話しかける。

「なあ、イズミ、その人は違うんだ。イズミが思つてゐるよつたな関係じゃないんだよ。」

「ぐすつ…ふえ。」

イズミが次第に大人しくなつていぐ。

「ヤスハラって覚えてるか？あの人はな、ヤスハラの彼女なんだ。」

「かのじょ？」

「ああ、やうだよ。一昨日からの用事でその彼女さんと会わないと
いけなくなつただけなんだ。」

「じゃあ別に連れてつてくれても良かつたくない？」

「いや、割と真剣な話だつたからイズミがいるとまことに思つたん
だ。」

「なにそれ？ ひどくない？」

もつ完全に泣き止んだようだ。イズミの顔に笑顔が戻る。

「つていうかつこてくるなつて言わなかつたか？」

言いつけを破つた拳句に勘違にされて泣かれてはいい迷惑だ。

「うん。だから着いていかなかつたでしょ？」

出た。イズミお得意の『屁理屈』だ。私は今まで一度もこのイズミの『屁
理屈に勝てた』とはなかつた。

「確かに着いてはきてなかつたがそれじゃあ結局同じことじやない
か。」

「でも邪魔しなかつたでしょ？ つてかタカちゃん気付いてた？ 気付
かなかつたでしょ？」

なぜか満足げな表情のイズミに少し悔しくなつてきた。

「う、うるさいな。もうこい！」

「タカちゃん可愛いーちゅー。」

機嫌を直したイズミが飛びかかってきた。

「ん。」

今日はこつもより長い。細かいキスを何度もされるとくすぐったくて変な気分になる。

「タカちゃん。」

「ん?」

「用事つてもう終わったの?」

隣で布団に包まっているイズミが聞いてきた。

「ああ。終わったよ。」

私は氣だるやうに答えた。

「何の用事だつたの?」

(どうしようか。答えてしまつていいものか。)

プライバシーの問題が一応はあったが、そもそもヤスハラにプライバシーなどというものは関係なかつたことを思い出したので教えてやる。

「ヤスハラの元カノがな、殺されたんだそうだ。それでヤスハラが

疑われてたからあいつの関係者から話を聞いてたんだ。」

「タカちゃん探偵みたい。」

「ああ、そうだな。」

まだ日も暮れていなこのて今日は本当に疲れた。このまま少し寝る
といつ。

タカハシの暇潰し

「タカちゃん。起きて。」

「…ん。」

イズミの声で目が覚める。時間は……五時半。夕飯前だ。少し寝すぎたなど自分でも思う。しかしそんなことよりもイズミに起こされたことに傷ついた。イズミだって同じくらい疲れていたはずだ。

（とにかく夕飯の準備をしないと。）

…といつても昨日のカレーがまだまだ残っていたので今度はカレーうどんにするだけなのでそれほど手間ではない。昼間のカレーライスで食べれると思っていたが作りすぎてしまつたようだ。

「タカちゃん。」

イズミが服を着替えながら呼ぶ。

「なんだ？」

ジーンズを履きながら答える。

「まさかカレーうどんとかじゃないよね？」

イズミが恐る恐る尋ねる。

「よくわかつたな。夕飯はカレーうどんだ。」

「え～。カレー もうヤだ～。」

「捨てたりしたらもつたいだね～。昨日お前が食べなかつたのが悪い。」

とは言つたがもしイズミがちやんと食べていたとしてもやはりカレーうどんになつていただろう。本当に作りすぎた。

「タカちやんが悪いのに。」

なんで私のせいなんだと思つたが言わない。これ以上付き合つたらまた言い負かされるのは田に見えている。私はまだ後ろで着替えているイズミを放つてカレーうどんを作る」とにした。

「いただきます。」

「…… いただきます。」

イズミが不服そうにつぶやく。じつをかい諦めてくれたようだ。

「タカちやん。」

「なんだ？」

「わ～ないよね？」

おやじくカレーの」とだらう。私もわ～カレーはたくさんだ。幸いあの汁っぽいカレーをほとんどそのまま利用したので鍋の中にカレーは残つていなかつた。

「ああ。これで最後だ。」

「良かつた。ほんとに。」

イス//かそり語//でカレーうどんをすする

「アーティスト」

卷之三

もう部分カレーは作らない」とある。もししくは「ストラト」のものを買つねうしてやうと思へ。

食器を片づけるのはいつも私の役目だ。言えば手伝ってくれるのだが何かへマをしないかと心配でいつもより余計に時間が掛かってしまって、で、私は一人で片づけている。さらに言えば、イズミに家事全般を頼むと、どれをやらせても確実にへマをする。買い物を頼んだ時にはスーパーに行かず、私が遅いと連絡をするまで通り道にある古本屋で立ち読みをしていたこともあった。

「タ力ちゃん。」

なんだ?

今日のイズミはいつも以上に甘えてくる。名前を何度も呼ぶのはその証拠だ。

「明日の学会に来てよ。」

「明日学会があるのか？」

明日は月曜日で私は四限までだがイズミは五限まである。いつもながらどこかで時間を潰して待つのだが学会があるとなればかなり待つことになるだろ？

「うん。まあ学会って言つても他のグループと研究を発表しあうだけなんだけどね。」

「へえ、そういうのか。わかった。場所は？どこでやるんだ？」

「えっと……確か工学部棟の大講義室。」

なるほど、あの広い大講義室なら潜り込むというか一般の学生にも開かれている可能性が高い。ただ一つ問題がある。

「本当に？」

イズミはひどい方向音痴だ。といつよりも場所や道筋を覚えよつといつ意志が無い。私は念のために場所をもう一度聞く。

「たぶん。」

「違つてたら連絡してくれ。といひで何の研究を発表するんだ？」

「レアメタルに似た性質を持つ合金の理論上の合成方法。」

……イズミが何を言つているのかはわからないが金曜日の夕飯時に言つていた内容だろ？

「へえ。」

それだけを返して洗い終わった食器を食器棚に戻していく。

「タカちやん。」

「なんだ?」

「呼んだだけ。」

(「こいつ……」)

イズミの研究発表

月曜日、四限目が終わって私は工学部棟の大講義室に向かう。昼休みにイズミと弁当を食べながら学会の場所を確認したが間違いはなかった。ついでに確認したのだがやはり一般の学生にも開かれていた。今回は合法的に入れそうだ。

大講義室に入る前に一般学生の名簿に名前と学籍番号を記入する。うちの大学はこういう部分の管理が徹底している。ほかの大学で行われる学会にイズミと行ったことがあるが名簿のようなものはない。大学の方が多いかった。

中に入るとやはり広い。普段なかなか訪れることがないだけに余計に広く感じられるが、それでなくとも他の大学の講義室よりもかなり大きい。私立だからだと思うがそれにしても我が大学は資金力がある。そしてそれを無駄なところに使う。

例えばこの机。横に長いのは講義室という一度に多くの人間を収容する構造上、当たり前なのだが別に国産のしかもヒノキである必要はないのではないか。机の端にあるメーカーと材質を表示するラベルにはそう書いてある。

もうすぐ学会が始まる時間なのでもうすでに多くの学生や教授、来賓が席に着いている。イズミも壇上右側のさらに右端に座っている。一般席はそれなりに空いているが後ろや端っここの席はほとんど残っていない。私はイズミがよく見えるようにまだ空いている前列右端の席に着いた。

「ただいまより、物性物理学の学識交流会を始めます。」

司会の男性が学会の開始を宣言する。が、私としてはまるで専門外の分野なので交流も何もない。ただイズミを待つのに都合がいいと、うだけの理由でここにいるのだ。あと真面目なイズミを見たいと

いつのもある。

(イズミが出るまで暇だな。)

前の方の席に座っているので居眠りするわけにもいかず、私は必死に眠気と闘っていた。

「続いて綾西大学、セキ教授のチームによる「レアメタルに似た性質を持つ合金の理論上の合成方法」の研究を発表して頂きます。フルカワ イズミさん、壇上へどうぞ。」

イズミの名が呼ばれた。それまでの眠気など忘れて私は壇上のイズミを見つめる。

「皆様こんにちは。セキ教授の下で研究しているフルカワ イズミです。」

そう言つてイズミが一礼する。やはりイズミはイズミだ。いくら真面目に振舞あうとしても挨拶しただけで不自然な部分が見て取れる。私にとってイズミの真面目な顔は新鮮なので不自然なのは全く構わないのだが他の人間にはどうだろうか。周りを見回してみると苦笑を浮かべている人がちらほら見えた。

「…………であるから、このとき…………」

イズミが何を言つているのか私には全くわからないが真面目な顔で一生懸命になつてているのはわかつた。そんなイズミも可愛いなど全然関係ないことを考えた。

「理論上の話はこれくらいにして最後に実際に粒子はどうこつた振

舞いをするのかを説明します。こちらの図を見てください。」

（御覧くださいって言いたいんだろうな。）

天井からスクリーンが降りてきた。Aと書かれた粒とRと書かれた粒が混ざり合つ様子が映し出されている。「おお。」と周りから歓声が上がる。どうやらすごいことらしい。

「簡単に説明しますと合金というのは2種類の金属を加熱し液体にして混ぜるという手法が一般的です。しかしその方法では比重の違う金属同士は混ざりません。例えば水と油のようなものをイメージするといいでしょ。」

イズミがこちらを見ながら言つ。もしかして水と油の例えは私のためのアドリブなのか。

「やついつた混ざりにくい金属同士を混ぜるような触媒があれば良いのですが、今回説明した方法では触媒が必要ありません。」

観衆が一同にうなづく。

「つまり2種類の金属をナノテクノロジーで超微細の粒子にして少しずつスプレーのようなもので吹き付けることで均等に混ぜることが可能なのです。」

イズミはさりに続ける。

「私たちのチームはこの方法で実験的にロジウムと銀の合金を作り出すことに成功しました。さらにその合金はレアメタルの一種であるパラジウムに近い性質を持つことも確認できました。周期表的にもロジウムと銀の間にパラジウムは存在することから乱暴に言えば

足して2で割ると1.5とわかりやすいしちゃう。」

イズミの発表が終わりに近いことが雰囲気でわかる。

「最後に近頃の産業技術にレアメタルはなくてはならないものとなつてあり、その価値は高まる一方です。つまり取り上げた理論は、無関係なもの同士を混ぜ合わせて自分にとって都合の良いものを作り出す、さながら現代の鍊金術と言つても過言ではありません。」

「一瞬イズミと田代が合つた。なぜか私に向けての言葉のような気がした。」

「では以上で発表を終わります。」

イズミが一礼するとどこからともなく拍手が起つた。どこか満足そうなイズミを見ながら私は改めてイズミの凄さを認識する。

「以上で全ての発表が終わりました。皆様長らくの御視聴有難うございました。」

司会が学会の終わりを告げる。私は背伸びをしながら大講義室を出た。

「タカラちゃん！」

会場を出てしまはうと待つていたイズミがやつてきた。

「ん。もうこいのか？」

「なにが？」

「同じ研究をしている人達に挨拶はしたのか？すごい評判だつたじやないか。」

素直にイズミを褒めてやると余程嬉しかったのか私の腰に抱きついてきた。少し恥ずかしい。

「そういうのは教授の仕事だから。全部任せてきた。」

「いいのか、それで。」

少し呆れながら張り付くイズミを剥がす。

「いいの。ってかタカちゃん意味わからなかつたでしょ？」

「当たり前だ。専門でもないのにわかるわけがない。」

「ちゃんとわかりやすい例えもしてあげたのに。」

やはりあれはアドリブだつたようだ。

「……まあそこだけはわかつたよ。」

「ほんと？タカちゃん大好き。」

「待て。」

また抱きつこうとしているイズミを止める。

「どうしたの?」

「やや不満やつこイズミが言ひへ。

「…………家に帰つてからだ。」

ヤスハラの事件の結末

火曜日、朝の授業はイズミと一緒にサボつた。専門科目の授業ではないしまあ大丈夫だろ。そして今、午後の授業を終えた私はあの喫茶店、「バロック」にいる。ヤスハラに呼び出されたのだ。今回はイズミを連れてきた。また機嫌を悪くされではたまらない。イズミには一応ベタベタしないよう、そして静かにするように言つてゐるが望みは薄い。

「よつ。」

ヤスハラが約束の時間ちょうどにやつてきた。

「ねつ。今日はどうした?」

「その前に、お前の隣にいるのは誰だ?」

「フルカワ イズミです。いつもうちのタカちゃんがお世話をなつてます。」

イズミが場違いな挨拶をする。

「そうか、俺はヤスハラだ。」

「それで?今日は何の話だ?」

早速本題に入る。

「ああ、例の事件だが、犯人が捕まつたんだ。」

「本當か？で、誰だつたんだ？お前の元カノを殺したのは。」

ヤスハラは「コーヒーを少し飲んでから答えた。

「俺の今の彼女だよ。ドアノブの指紋が一致したらしい。」

「え？」

私はもう一度聞く。確かに彼女は女友達と遊んでいたはずだ。それが事実なら私は嘘をつかれたようだ。

「今の彼女だよ。ハシダ ノリコだ。」

驚きはしたが良く考えてみると、土曜日の電話で話した時の無関心な印象はそういうことだったのか。しかし実際会った時にはあの無関心さは消えていた。私は見事に騙されていたらしい。女というものは恐ろしい生き物だ。

「なんで彼女はそんなことしたんだ？」

「たぶん俺のせいだ。」

「お前まさか前の彼女とよりを戻そうとしてたんじゃないだろうな？」

「いや、そうじゃない。俺がいつまでもレイコと付き合つてた時の物を処分しなかつたからだと思う。それであいつ、勘違いして。」

（大雑把な性格がこんなところまで。）

「そんなにお前に惚れてたのか。今の彼女は。」

「こいつにそんな甲斐性があるとは思えなかつた。が、私に女性の気持ちはわからない。」

「正直うざりしてたんだ。今日はどうしてただの今は誰だだの。」

「なるほど。ハシダノリコはイズミと程度は違つが同じタイプの人聞らし。」

「それにしたつてショックだつただろ。」

「いや、むしろせこせこしてゐよ。ちゅうど別れたいと思つてたんだ。」

ヤスハラは厄介事が片付いたといつよつた表情で答えた。

「それは冷たすぎじゃないか?」

この前会つた時には気付かなかつたがヤスハラは無愛想を通り越していくらか冷たい人間になつてしまつたようだ。何も変わってないと思つていたがそうではなかつた。

「タカラちゃん。」

隣で暇そうにしているイズミが呼ぶ。もう頼んだココアは無くなつていた。

「どうした?」

「話終わつた？もう帰りたい。」

「ああ、そうだな。」

（もう終わつてもいいだろ。）

「ヤスハラ、他に何かあるか？」

「いや、話はもう終わつた。このあと何か用事でもあるのか？無かつたらこの前言つてた……」

「いえ、大丈夫です。お気遣いなぐ。」

イズミが言い終わる前に言葉を被せる。

「あ、ああ、そつか。悪かつたな、急に呼び出しだ。」

「いや、構わないよ。またな。」

イズミに引つ張られて「バロック」から出る。会計を忘れていたがまあこいだらう。ヤスハラに押しつけてしまおつ。

イズミの嘘

「タカちゃん。」

家までの帰り道、イズミが話しかける。

「なんだ？」

「結局タカちゃんは何してたの？」

「それは……」

言われてみればそうだ。私はヤスハラの件で何も力になれなかつた。泥船は脆くも沈没してしまつたようだ。私がしたことといえば、悩めるヤスハラの話し相手になつてやつたことぐらいで、そのおかげでイズミとは喧嘩をし、果てには泣かせてしまつた。

「タカちゃんはさ、」

言葉に詰まる私にイズミが話を続ける。

「そんなんに頭良くないんだから難しいことがあつたら直ぐうちに相談した方が良いと思うんだ。」

イズミが地味に毒を吐きながら言ひ。

「そりや確かにお前ほど賢くはないけどさ、私の友人の、しかもかなり立ち入った話にお前を巻きこむわけにはいかないだろ？。」

「でも結局話しかけたよね？もつもじ早く話してくれてたら別の道もあつたのにね。」

「まあそりが……ん？ちょっと待て、別の道って何だ？」

イズミが気になる事を言ったので聞き返す。

「ん？うちそんなんこと言つた？」

イズミが柄にもなくしらを切つてくる。イズミは何か隠してくるのではないか。

「今言つただろ？、もう少し早く話してたら別の道もあつたって。」

「ああ、そのこと。だって直ぐに相談してくれてたら喧嘩なんかしないで済んだのにねつて。」

そつ言つてイズミは私に笑いかける。少し釈然としないがイズミの話が分かりにくいのはいつものことだし、イズミの考えを読むのは常人の私には不可能だ。

「なんだ、そういうことか。別の道なんて伝わりにくい言い方するなよ。」

「ふふつ。」

イズミが抱きついてきた。まあ家は田の前だし構わないだろう。どうかお隣さんに見つかりませんよ。」

イズミの嘘（後書き）

「」で彼らの話はおしまいです。しかしイズミがこの事件の間、一体何をしていたのか、そしてイズミの言つ「別の道」とは何だったのか、ここから先は本来ならば黙るべき部分です。なぜならここまでが彼らことひての真実なのですから。

イズ://の不安（前書き）

ここからはこわゆる裏話なので第一話から第十一話までを先に読むことを勧めます。

時間は第四話に戻ります。

イズミの不安

土曜日、タカちゃんの「用事」が気になつて仕方が無いからソリソリついて行くことにした。

（タカちゃん、何の用事なんだろう。タカちゃんの性格から考えて浮気はあり得ないよね。うちには見せられない秘密があつたら面白いな。でも何で隠すんだろう? うちはタカちゃんのどんな部分も受け止めてくれるのに。）

急いでラーメンを食べいつもの駅へ向かう。戸締りは忘れない。駅に着くとホームにタカちゃんの姿が見えた。見つからないように少し離れた別の車両に乘る。たしか行先はうちの大学近くの喫茶店: 「バロック」だつたはず。今まで一度も入ったことが無かつたがそんなことはどうでもいい。

（あれ? タカちゃん降りないの?）

「バロック」へ行くならいつもの駅で降りないといけない。なのにタカちゃんが動かない……というか居眠りしているように見える。

（タカちゃん嘘ついた……?）

そう考えたら急に不安に襲われる。でもその不安は直ぐに無くなつた。タカちゃんが慌てて電車から降りた。うちも見つからないようにそれに続く。

今は三時半。タカちゃんが「バロック」に入つていいく。中にはいる人を確認したように見えた。タカちゃんが真つ直ぐに席へ向かう。そ

こで信じられないものを見てしまつた。

(タ力ちゃん浮氣してる……！)

向かいの席には綺麗な女人が座っていた。少し落ち着けとメニューからココアを注文する。その間も二人の会話に聞き耳を立てる。

（……よく聞こえない。でもこれ以上近づいたら見つかりそうだし
..）

あの一人の間に乱入しても良かつたけど、もし勘違いだったら死ぬほど怒られるし、それも嫌だ。もう少し集中して盗み聞きをすることにする。

「一緒に買物」

「仲は良二...」

「……昔から……」

聞こえてくる断片的な会話を聞いていた内に自分が泣いていた」とに気が付いた。これ以上ここに居たくない。会話を続ける一人から逃げるように店を出た。

(…ちゃんと、お店から出たらちゃんと話を聞くわ。)

出入り口の見える少し離れた所から人の出入りを確認する。先に夕力ちゃんが出てきた。

「夕」

声を掛ける暇もないくらいの早足でどこかへ行ってしまった。仕方なく後から出てきた女人に話しかける。

「あの。」

「はい。何でしょ?」

「さつきまで一緒に居た男性、タカハシの友人のイズミといいます。」

胸が少し痛む。

「はあ、ハシダといいます。」

こっちを疑うような目で見つめるハシダとかいう人は返事をした。

「ついさつき見かけたタカ…ハシの様子がおかしかったので、どんな話をしたのか気になつたんです。」

嘘だ。普段通りのタカちゃんだった、何か急いでいたけど。そこまで言つとハシダはタカちゃんとどんな話をしたのか大まかに話してくれた。何かを隠して話しているということは良くわかつた。そのあとその他愛のない世間話からハシダには彼氏がいてその人がタカちゃんの友人だということもついでにわかつた。ヤスハラといいうらしい。

(あとはタカちゃんの態度次第かな。)

適当に挨拶を交わしハシダと別れ、帰路についた。途中タカちゃん

から着信があつたが今は話したくない。

無視をする。

ヤスハラといづみ（前書き）

裏話その一。第一話から第十一話までを先に読むことを勧めます。時間は第六話に戻ります。イづみが何をしていたのか。

ヤスハラといズミ

日曜日、昨日の夕方、タカちゃん喧嘩してしまった。仕方が無かつた。タカちゃんが悪いんだから。

喧嘩の勢いで寝たからとんでもない時間に目が覚めた。時計の針は午前一時を指している。八時間ほど眠つただけで起きてしまった。いつもならあと一時間は眠れるはずなのに一度寝は出来そうにない。

（ん~……どうしようかな。）

夕飯は食べなかつたがタカちゃんが買つてくれたプリンを食べたのでおなかはそんなに減つていなかつた。

（あ、そうだ。今のうちに……）

タカちゃんの携帯を探す。昨日聞いたヤスハラという人の電話番号を確認するためだ。他人の携帯を盗み見るのはいけないことだけど今はそんなことにこだわつていられない。

（え~っと確かこの辺に…あつたあつた。）

タカちゃんは物をなくさないよういつも決まつた場所に置く癖がある。電気を点けるわけにいかないので良く見えないが大体の場所は覚えている。タカちゃんの携帯を開き電話帳を検索する。「ヤスハラ」の欄を見ると「丁寧に住所まで登録してあつた。

（とりあえず暇だし行ってみよつかな。）

とにかくタカちゃんとあの女の人の関係をはっきりさせておきたい。でもタカちゃんに聞いても答えてくれなかつたのでこの人に聞いてみるといよ。

（本当に浮氣だつたらあれだよね。……修羅場。うちはうこうの見たことないしそれはそれで面白そつ。タカちゃんは渡さないけど。）

ヤスハラの電話番号と住所をメモして出掛ける準備をする。

（どうあえずタカちゃんとハシダつて人の関係をはっきりさせてそれから考えよ。ってかまだ一時過ぎだしもしかしたら起きてるかも。）

家を出て駅へ向うが時間が時間が。終電も無いだろう。駅前でタクシーを拾つこにする。駅前は普段からそれなりに賑つており、うちは夜中に出掛けることはほとんど無いがたぶんタクシーも拾えるだろう。それにしてもこの季節、この時間、寒いに決まつている。寒がりなつやはいつも以上に着込んできたがそれでも寒い。

（えつと……タクシー、タクシー……）

思つた通り駅前に着くとタクシーは直ぐに拾つことができた。

「ひさばんは。どちらまで行かれますか？」

まだ若そうな運転手に行先を告げ、到着するまでここからの作戦を練る。こんな時間まで仕事ができるのは若い運転手だからだろう。というよりもこんな夜中にお年寄りの運転手に運転して欲しくない。居眠り運転なんてされたらたまたもんじやない。

「お姫さん、着きましたよ。」

「あ、いくらですか？」

「1440円になります。」

「はい。ありがとうございます。」

そう言つてタクシーを降りた。値段的に考えると5km程走ったようだ。住所からは想像できなかつたが割と近所に住んでいるらしい。あとはメモを頼りに歩くだけだ。が、それが一番の難関だつたりする。

ヤスハラの本音（前書き）

裏話その二。第一話から第十一話までを先に読むことを勧めます。時間は第六話に戻ります。イズミの誤解が解けていきます。

（み～ぎ、まつすぐ、ひだり、ひだり、み～ぎ……）

タクシーを降りて細い路地を歩く。行き道を覚えておかないと帰れなくなってしまう。苦手なのはわかつてるけど頑張つて道を覚える。

（じじかな。このアパートの……）

なんとか目的のアパートに着いた。言葉は悪いが「ボロアパート」という言葉はこの建物のためにあると本気で信じたくなる程の見た目をしている。吹けば飛びそうなトタンの屋根に下の方にカビがびっしりと生えた木造の壁。隣の住人の生活音が良く聞こえそうだ。二人同時に決して上れそうにない錆びた階段を上った二階の213号室が「ヤスハラ」の部屋のはずだ。

「おい。」

（つづ……）

ヤスハラの部屋の前で突然声を掛けられて心臓が飛び跳ねる。驚いて後ろを振り返ると一人の男が立っていた。何か用があるのだろうか。よく見るとすつきりとした顔立ちでいわゆるイケメンである。服装に気を使えば歌つて踊れる某事務所にも入れるんじゃないかな。

「はい、何でしょ？」

少し緊張しながら返事をするとその男の人はぶつきりぽつて答えた。

「俺の部屋に何の用だ？」

どうやらこの人が「ヤスハラ」らしい。酔っている様子はない。もともと無愛想な人なのだろうか。それが自分の部屋の前をうろうろされて苛立つているのかもしれない。まあ何にしてもヤスハラがまだ起きていたのは好都合だ。

「ああ、こんばんは。タカ…ハシの友人のイズミといいます。」

「そうか。で? こんな時間に俺に何か用でもあるのか?」

(「い」んな時間」に帰ってきたくせに。)

声の調子から怒っている様子ではない。この人は無愛想なんだなとわかった。

「ハシダさん…という女性を知っていますか?」

早速聞きたいことを尋ねる。

「ああ、知ってるも何も俺の女だ。」

「え? そなんですか?」

知らないふりをして相手の反応を観察する。

「そうだよ。それがどうかしたのか?」

「い」じや話しこくいのでとりあえず中に入れてくれませんか?」

相手から申し出てくれるのを待つつもりだったが不意にからつ風に吹かれて気付く。このままだと寒さでおかしくなってしまいそうだ。

「ん？ それもそうだな。まあ上がれよ。」

そう言ってヤスハラは部屋の鍵を開けた。彼に続いて部屋に上がると本当に彼女がいるのか疑わしくなるような惨状にまた驚いた。うちのタカちゃんとは大違った。

「その辺に座つてくれ。お茶でいいか？」

「あ、ありがとうございます。」

（……でも、これ、どこに座ればいいの？）

「足の踏み場もない」とはこのことだ。下に散らばっている物を端に寄せて座れるだけのスペースを作る。やつとの思いで座つたのと同時にヤスハラが二人分のお茶を持ってきた。足で乱暴に自分のスペースを確保してヤスハラも座る。バサバサッとヤスハラの座つた隣に積み上げていた物が崩れたが当の本人は気に留めていない。

「何の話だっけか？」

「えっと、あなたの彼女のハシダさんとタカハシが一人で話しているのを見て話題にしたらタカハシがわけわからんない嘘ついて意地を張るから二人の関係をはっきりさせたいんです。」

かなり誇張した表現だが間違つてはいないし、間違つっていても構わない。

「ふーん。なるほど、なるほど。そりゃ、あれだよ。俺が頼んだんだ。
だ。」

「えつ?
」

「えつとな、良く聞けよ。」

イズミの本質（前書き）

裏話その四。第一話から第十一話までを先に読むことを勧めます。時間は第六話に戻ります。イズミの鍊金術。

イズハラの本質

ヤスハラは自分が巻き込まれている事件のこと、その解決手段の一つとしてタカちゃんにも相談したこと、それから今の彼女…ハシダ…とは別れてしまいたいということまで話してくれた。そこまで聞いてある考えが浮かんだ。

「じゃあそれ全部一気に解決する方法がありますよ。」

「何? ビリやるんだ?」

ヤスハラが話に乗ってきた。

「少し残酷な方法ですが。」

「そんなことは構わねえから。早く話してくれ。」

「…その事件の犯人、ハシダさんにしちゃいましょう。」

ヤスハラの顔が一気に険しくなった。誤解が解けた以上ハシダを追い詰める理由は無い。それでもタカちゃんと喧嘩をしてしまった原因を作った罪は重い。

「何を言つてんだお前は。そんなことできるわけねえよ。それに…」

「それに?」

「もうその事件は解決してるんだ。」

「ひかりを馬鹿にするような目で見てる。少し腹が立つ。

「…とこ'うと?..」

「玄関の内側のドアノブから俺じゃない誰かの指紋がでたらしいんだ。」

「そうですか。それが誰かはまだわかつてないんですか?」

「ああ、まだだ。」

「じゃあ大丈夫です。」

静かな語氣で相手を飲み込む。

「ん?」

「もしかつて言つたことができたとしたら、どうしますか?」

「どうする? て……そつやあ……まあ、俺としては都合が良いんだらうけどよ、もしづれたら……」

ヤスハラについつきまでの勢いが感じられない。しかしそんなことはどうでもいい。重要なのはヤスハラが「都合が良い」と言つたことだ。聞き逃すわけがない。つまりヤスハラ自身もできるなら、そしてばれないのならそれが良いと認めたといつことだ。

「ばれません。なぜなら警察は、というより人間は一度調べたところをもう一度調べるには何かしらの理由が必要で、調べ方も初めて

の時より煩雑になるものだからです。」

「……もつとわかりやすく言つてくれ。」

「一度調べた場所にならうち一人の証拠が多少残つたとしても理由さえ言えなければ問題は無いということです。そしてより致命的な証拠を言えてやればいいところです。」

「つまり？」

「だからひつりがハシダさんの指紋を一度調べた部分、例えばその玄関のドアノブに上書きをすればいいんです。その後もう一度くらい取り調べがあると思いますから、その時に警察を罵りながら「もつといちど全部やり直せ。」へりこ言ひてやればいいんです。」

「でも、どうやって？」

「簡単です。今ここにハシダさんが最後に触った場所や物はありますか？あとセロハンテープ。」

「ちょっと待つてくれ……えーっと……ああそうだ、ティーカップがあるぜ。今日……つていうか昨日の晩飯の時に使つたやつが。」

ヤスハラがセロハンテープとそのティーカップをハシダの指紋が消えないように持つてきた。

「こつもハシダさんはこれのどの部分を持っているんですか？」

「いいだ。取つ手の上と下をこいつこいつ風に。」

持ち方を確認してセロハンテープを慎重に貼り付ける。まだ剥がさない。

「じゃあ行きましょうか。」

「え? ど? 」「?

立ち上がりうつるとヤスハラが気の抜けた声で尋ねた。

「もちろんその事件現場です。この時間なら警察もまだ来ていないでしょ? 」

「あ、ああそうだな。車で行こう。」

有難い。外はまだまだ寒そうだ。それに早ければ早い方が良い。時間は午前二時半だ。

「つと、その前に。」

「ん? どうした? 」

車のキーを手にヤスハラが振り返る。

「レイ」「セラの皿の合鍵はあるんですか? 」

「まだあつたはずだ。ちょっと前もそれがもとでノリコと喧嘩したんだ。」「

「…そうですか。」

そう言つてヤスハラは合鍵を探し始める。

「お、あつたあつた。」

部屋を出てセロハンテープの貼つたティーカップ、車のキー、レイ
ノの自宅の合鍵を持つて車に乗り込む。

「どれくらい掛るんですか？」

「急いで三十分くらいだ。」

（じゃあ着くのは午前四時頃か。ってか帰り道覚える意味無かつた
し。帰りも駅まで送つてもらおつと。）

ここに来る前には思いもしなかつた展開に少し慌てている自分がい
る。でも自分なら大丈夫だろ？？という自信もある。大丈夫、大丈夫。

「着いたぞ。降りてくれ。」

車を降りると目の前に立派なマンションがある。ヤスハラのアパー
トとは段違いだ。台風にも負けない頑丈な屋上にカビどころか汚れ
一つない綺麗な白い壁。エレベーターまで付いている。錆びてなど
いないし300km/hまで耐えられると書いてある。

「Jリの最上階、十三階だ。」

「そうですか。」

見た目が立派なだけにエントランスにオートロックの扉や防犯カメラ
があるものと思っていたがそうでもなかつた。こんな時間にすれ

違う住人はペットの散歩に行く人ばかりだ。都会特有の顔を合わせても軽い会釈さえしておけばまず怪しまれることもない。

「ポーン、十二階です。」

エレベーターが目的の階に着いたことを知らせる。扉が開いてすぐ黄色い現場保存用のテープが見えた。まだ警察は来ていない。

「あそこだ。」

「あの。」

先に行こうとするヤスハラを呼びとめる。

「ヤスハラさんはここで他の人が来ないよう見張っていてください。」

「わかった。」

本当にわかっているのか怪しいがさつとやるべきことをやつてしまおう。ヤスハラから合鍵とティーカップを受け取りレイコの自宅の鍵を開ける。寒いからと着けてきた手袋が役に立つた。自分の指紋が付かないように慎重にドアを開ける。ドアが閉まらないように足で押えながら手袋を外しティーカップのセロハンテープを剥がす。そして剥がしたセロハンテープを玄関のドアの内側のノブに方向に気を付けながら貼り付ける。自分の指紋が付かないように注意しながら、しっかりと指紋が写るように押さえつける。

「ふう。」

セロハンテープを剥がしドアを閉め鍵を掛ける。

(これまで良じつじ。)

あとは警察がやつてくれるだらう。ヤスハラと共にマシンションを出る。

「駆まで送つてくれよ。」

「ほんとですか！？ ありがとうございます。」

「といひや。」

ヤスハラが車を運転しながら話しかける。

「これで大丈夫なのか？」

「まあ大丈夫だと思ひますよ。それから……」

ヤスハラに言つておかなければならぬことがある。

「警察に話を聞かれた時にドアノブを調べるとかはつきり場所を言つ必要はありません。」

「わかった。」

「あと、また今度会つ機会があると思いますが初めて会つたよつて振舞つてくださいね。」

「ん？ わかった。」

時間は午前五時半。駅まで送つてもらつたところでヤスハラが口を開いた。

「あのよ。」のあとすぐ戻るのか？」

現代の鍊金術（前書き）

裏話その四。第一話から第十一話までを先に読むことを勧めます。時間は第六話に戻ります。イズミの推測。

「 もうですか、もうかしましたか？」

早く帰つてタカちやんと仲直りしたい。もうじ始発の時間だ。

「 」の事件をお前がどう思つてゐるのか聞かたいんだ。

「 ん~…… まあいいですよ。 まだ話しましょうか？」

この時間に帰つてもタカちやんは寝てゐるだらう。 でも外は嫌だ。絶対に嫌だ。

「 じゃあ… あんまりいいか？」

ヤスハラは駅前の漫画喫茶を指差した。

「 じゃあそこでいいです。」

「 ど、どう都えてるんだ？」

「 ど、どう都えてるんだ？」

漫画喫茶の一室、ペア席を借りる。レジの店員に由て田で見られたが気にはしない。

「 ど」から聞きたいんですか？」

質問が漠然としそうさて話にならない。

「そうだな…じゃあこの事件の犯人は誰だと思う?」

「ハシダ。」

「そうじゃなくて。真犯人だよ。」

ヤスハラがこちらを睨む。少しふざけただけなのに。

「ん…たぶんストーカーです。犯人は男の人か複数でレイ「さんの知り合いに怪しい人がいなくてレイ「さん人気者ですから。」

「警察も言つてたんだがなんで証拠もないのに犯人が絞れるんだ?」

「確かに…レイ「さんは自宅で殺されてたんですね?」

「ああ。」

「で、争つた痕跡がなかつた。」

「ああ、そうだ。」

「さりに知り合いに怪しい人がいなくて…」

「良い女。」

ヤスハラが合いの手のよつに続ける。

「そう。だからレイ「さんと知り合いじゃなくて、お金目的じゃなくて、男の人なんです。」

「だからストーカーなのか。」

「はい。」

「いや、そこじゃなくて、部屋が荒らされてなかつたら何で男か複数なのかが知りたいんだ。」

「ああ、知り合いでもない人間が襲つてきたら抵抗しますよね？なのに部屋が荒れないのは一方的に殺されたからだと思つんですね。」

「なるほど…それで腕力の強い男か複数なのか。ん？じゃあノリコ一人じゃ無理があるんじゃねえか？」

「そこも大丈夫です。あ、忘れてた。」

「とても大事なことをヤスハラに言つておくのを忘れていた。」

「何だ？」

「普段履かない靴持つてますか？持つてたら防犯カメラに映るようハシダさんに捨てさせてほしいんです。」

「ああ、足跡な。わかつた、そうするよ。」

「あと一つ、これはあんまり関係ないんですけど…」

「ん？」

「ハシダさんの友達も共犯とかで捕まるかもしねいんです。」

ヤスハラの顔が険しくなる。

「お前今まで黙つてたのか。」

「はい。虹のと断られたと思いましたから。」

ヤスハラが苦虫を噛み潰した様な顔をする。が、しばらくすると観念したのか普段の顔に戻つた。

「それから……」

「まだあるのか？」

縋るよつな声で尋ねる。

「漫画読む時間あります？」

びっくりするほど氣の抜けた顔でヤスハラが答える。

「俺はもう悪いんだ。今はこゝで寝よつて思つて画まで取つてあつるよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9306p/>

現代の錬金術

2011年2月28日09時58分発行